

「耕三余一」の思想

高橋孝助

「耕三余一」とは三年間耕作して一年分を備蓄し災害に備える、農業を基幹産業とする国家（官僚）の「足民の政」の基本姿勢である。「耕九余三」ともいう。これは、工業化以前の前近代社会で、しばしば大自然災害に襲われ、数え切れにないほどの人命を失い、農地を荒廃させ、財を失ってきた中国の黄土高原に伝わる話である。民衆を満足させる政とは、直接生産に当たる農民の耕作意欲を喚起し、余剰の収穫物を不要不急のものに浪費させずに災害のために備蓄させることである、という。このとき、ただでさえ水不足で穀物生産が不足する黄土高原にあって、ケン栽培が浸透し、肥沃な土地はこの呪われた作物の栽培にあてられていた。「耕三余一」の美風はすたれ、自然の猛威に蹂躪されるにまかせ、数十万、数百万の人命が失われた。そのうちのひとつが、近著で明らかにした山西、山東、河北、河南、陝西の5省を襲った飢饉は、一説によると餓死者1000万人を超える世に「丁戊奇荒」と呼ばれる大飢饉であった（『飢饉と救済の社会史』2006年）。

ところで、この旱魃がピークに達した1877年の雨量について、次のような数字を目にした。すなわち、山西省各地で連続して降雨ゼロは、短いところで50から60日、長いところで3カ月以上、洪洞県では349日降雨ゼロ、省全体では年降雨量はわずかに5.2ミリ。200日以上連続して降雨がなかった県が14、100-200日降雨ゼロが61県、省全体の平均年降雨量は116ミリ。河北省のいくつかの県では、連続降雨ゼロあるいはお湿り程度が238日、陝西省の大部分の地域が3から4カ月、1年前後にわたってお湿り程度の雨しか降らなかったという（韓淵豊ら『中国災害地理』陝西師範大学出版社、1993年）。

わたしたち（わたし）は修業時代、徹底した実証史学を教え込まれた。史実（根拠）が判然としないことは言うな書くな、である。したがって、今回に限ったことではないが、今回も関係する『地方誌』を調べまくった。当時は気象台も設置されず、気象観測も行われていない時代だから、『地方誌』（県レベル）の断片的な記載から読み取るしかないと思うのは同然である。仙台にはそんな蔵書をもつ大学図書館はないが、最近は大図書館の閲覧サービスが行き届き、さらに書庫まで入れてくれる図書館があるので、徹底調査が随分とやりやすくなった。しかし、数年にわたる図書館通いにもかかわらず、この数字を記載した『地方誌』には遭遇しない。中国の研究者はどのようにしてこの数字を得たのか。わたしは、尋ねることもせずに、また自らの「立証」責任を放棄して、近著でこの数字を使ってしまった。

今のわたしは、長い間「耕三余一」の思想を行動の指針の一つとすることを忘却し、必要な備えを怠ってきたことにたいする自責の念がある。そして確定した数字を得ることの必要性とそれを得ることの困難さを痛感させられている。効率主義ではない実績主義とはなにか。わかればそれを追いたいし、普及したい。それは何か。毎日、自問自答するのであるが、それよりも状況変化は目まぐるしく、現実はより厳しく、向けられる舌鋒は厳しいのである。

（2007. 3. 16記）